



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第8回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

メッセージは伝わっているか

世の中は、右を向いても左を向いても「改革」の話ばかりです。郵政改革に年金改革、国会改革に財政改革。政治家だけではありません。会社でも学校でも、リストラや学部再編で、本来の仕事よりも改革のための仕事の方が多いくらいではないでしょうか。

教会も同じです。今日の教会は、日本社会の縮図ですから、少子高齢化の波をもろに受けています。このままでは、婦人会も壮年会も立ちゆかなくなる。どうしたら改革ができ

るだろうか、とみなで頭を悩ませるのが昨今の日曜午後の風景になっていきます。

改革は、ある集団の中で、人々を賛成派と反対派に色分けします。そしてしばしば、両者の間には深いコミュニケーション・ギャップがあります。実はここには、メッセージの伝達という点で、人間のコミュニケーションに共通の基本的なパターンがあるように思います。

メッセージには語る側と聞く側があります。人が人へ何かを伝えようとする場合、メッセージの送り手は内容の明瞭性(intelligibility)、つまりどうしたらそれを正しく相手に理解してもらえるか、ということに心を砕きますが、受け手の方では、まずそのメッセージの信憑性(credibility)に関心をもちます。このギャップが認識されていないと、こんなことになりました。語っている人は、自分の語っている内容に入れ込んで、熱心にその利

点を説明するのだが、聞いている方は、そもそも何でそんな話になるのか、狐につままれたような顔でお互いに冷めた目線を交わしている……。

どうしてそうなるのでしょうか。それは、メッセージを語る方は、自分が語ろうとしていることをよく知っているのに対し、聞く方は、その新しい情報を自分の知識体系のどこに位置づけたらよいかかわからないでいるからです。発信者が受信者の信頼を獲得していかない場合には、議論以前に、そもそも内容の吟味に入るべきかどうか大きな問いになります。見知らぬ人からいきなり小包が送られてきたら、昨今のことでですから、わたしたちは開封するのに躊躇(ちゆうちゆう)するでしょう。送り主の方では、「中身を見てくれればわかる」とやっきになって繰り返すかもしれませんが、受け取った人は、そもそもそれを開けるべきかどうかで悩んでいるのです。いくら「中身

たいていの場合、「対話をしよう」ともちかけるのは、

対話が始まると語る側に回る人であり、

自分が語るべきことを知っている人です。つまり、

対話の席で有利にふるまうことのできる人なのです。

対話の席につこうとしない人々を責めるばかりでなく、

その人々の躊躇や疑念へと思いをめぐらす時、はじめ

真の対話への糸口をつかむことができるように思います。

で勝負しよう」ともちかけても、これではメ
ッセージは伝わりません。

五・一五事件の時、「話せばわかる」と言
った犬養首相に対し、青年将校らは「問答無
用」と答えたと言います。それがどこまでが
本当の話なのか、どちらが改革派で、どちら
が正しかったのか、ということとはさておき、
そのかたちに注目してみると、ここにもメッ
セージの送り手と受け手の間でギャップがあ
ります。首相の方はメッセージの「内容」に
自信をもっていますが、将校たちの方はメッ
セージの「発信者」に疑念をもっています。
話し合いを始めれば、きつとごまかされるに
違いない、と思っているのです。

もちろん、だからといって「問答無用」と

ズドンとやられたのではたまりません。メッ

セージの送り手は、「話せばわかる」ではな
く、まず相手の信頼を得なければなりません。

相手の疑念は、メッセージの内容ではなく、
その話し手に向けられているからです。

戦後民主主義に育てられたわたしたちは、
「対話」の効用に絶大な信頼をもっています。

話せばわかるのに、あの人々はなぜ平和裡に
理性的に話し合わないのだろう、と苛立ちま
す。宗教研対話の歴史にも、同じような構図
があります。対話の席につこうとしない人は、
いかにも頑迷でルールを守らない人々である
かのように思えてきます。

しかし、たいていの場合、「対話をしよう」
ともちかけるのは、対話が始まると語る側に

回る人であり、自分が語るべきことを知って
いる人です。つまり、対話の席で有利にふる
まうことのできる人なのです。わたしたちは
対話の席につこうとしない人々を責めるばか
りでなく、その人々の躊躇や疑念へと思いを
めぐらす時、始めて真の対話への糸口をつ
かむことができるように思います。

誰でも、大切な人にプレゼントをあげると
きは、パッケージやシチュエーションに気
を使いますね。しかし、相手が見ているのは、
包装紙や雰囲気だけではありません。それを
手渡すあなた自身が、はたしてプレゼントの
中身とどれほど深い相即の関係にあるか。そ
れを見極めようとしているのです。

実は、このようなメッセージの伝達につい
て、わたしたちは最高の模範を知っています。
それは、聖書に記されたイエス・キリストで
す。イエス・キリストは、わたしたちに与え
られた神の言という救いのメッセージであり、
しかもそのメッセージの送り主たる神ご自身
と究極の一致のうちにある方です。だからそ
の言葉に、わたしたちは信頼を寄せることが
できるのです。

わたしたちの語る「証し」の言葉も、相手
からこの一致が見えるとき、しっかりと伝わ
ります。「証し」は、語る人自身がそのメッ
セージの中の登場人物でもあるという、独特
な構造をもったメッセージだからです。 Ω